

ヘレニズム・ローマ時代の知の系譜 2

——正統的知識と非正統的知識 V——

大 出 晃

この論文では前編をうけて正統的知識から非正統的知識にわたる連続スペクトル上の非正統性の色彩の濃い諸領域での知識の諸形態：占星術，医術，錬金術，魔術，各種の占断術，について論ずるが，まず，スペクトルの中央に近い占星術と医術から考察をはじめることにはしたい。

4 占星術

(a) 占星術の成立過程 T. Barton はその著書 *Ancient Astrology* の初めに現代の占星術者はカウンセラーを気どっているが、「古代の依頼人たちは予言，あるいは，特定の決定をもとめていた」と述べている(1-2)。古代の正統的知識の目標は過去からの説明で，未来への予言ではなかったというわたしの主張からすれば，これは占星術が正統性を要求する権利を喪失していることを語っている。そこで，この喪失過程を考察するのがこの項の目的である。

天文学 (*astronomia*) と占星術 (*astrologia*) の語は紀元後 6 世紀までほとんど無差別に用いられていた。それゆえ，占星術の起源をさぐることは天文学の起源を探索することにひとしく，古代における知の系譜に関する拙論で考察した通りであるが，その結論を要約すれば，メソポタミア天文学は前 2 世紀ごろに明確な形をとった推算暦を頂点とする予言的手法であり，古代ギリシアのそれは天体運動の幾何学的モデルの設定を目標とし，エジプト天文学の功績は実用的暦法の作成にあった。占星術の成立はこれら古代の天文学的知識の混淆から

(2)

生じたが、その経緯を多少詳しく見てみよう。

「鋤一星」(Mul. Apin)なる前11世紀のメソポタミア文書には赤道に平行な3本の帯状の17個の星座が記され、後の獣帯の起源とされる。前7世紀までのニネヴェの古文書には王たちへの占い師の予言が記載され、前6世紀後半には黄道を30°ずつに12等分する手法が導入され、前464年には獣帯がはじめて用いられている(Barton 13-14)。現存するホロスコープ(誕生占星術)の出現は前5世紀初めで、それには「水星の双子座の東」や「金星の水瓶座の正面東方」における最初の出現といった、誕生日近くの星座上での惑星の出現が語られ、前410年には「月は蠍座の角の下、木星は魚座に、金星は牡牛座に、等々」といった惑星の詳しい位置記述が見られる。多くのバビロニア・ホロスコープの文献はアレキサンドロス東征後のものであるが、このような資料の存在とギリシア・ホロスコープの最初の記録は前72年の誕生に関するものであるところから、ホロスコープの成立をギリシアにもとめる見解は支持しがたい。初期の文献は現象の解釈を述べていないが、前3世紀には、未来の富、出世、結婚などの解釈が見られ、月の満ち欠け、獣帯12宮の細分方式が導入されて、ギリシア的ホロスコープの手法の骨格が出現した(Barton 15-7)。

メソポタミアとギリシアの天文的知識の関係を考えるうえでは、ベーロッソス(Berosos)という、コス島に在住して占星術の学校を開いたとされる前3世紀初めの神官が重要である。彼はBabyloniakaなる占星術書を著わして、セレウコス王朝のアンティオコスI世にささげたとされる(Dijksterhuis 86; Barton 23)。もうひとり前3世紀半ばのバビロニアの占い師Sudinesであるが、近年科学史家の注目するのは前2世紀の天文学者ヒッパルコスで、彼は最初の星のカタログをつくり、バビロニアの天文学的定数を活用して理論を構成し、占星術の普及にも貢献した。前3世紀以前に占星術がギリシアに伝えられた根拠は乏しいが、その伝播はアレキサンドロス以後のペルシアにおけるギリシア植民地の建設に負うところ大きいとされる(Barton 23)。

古代エジプトの実用的な暦法は後世に多大の影響を与え、占星術の理論化にも貢献をした。占星術の〈揺籃〉がアレキサンドリアにあり、それゆえ、その

起源がエジプトにあるといわれたのも理由なしとしない。すでに、エジプトは前6世紀末以来ペルシアの影響下にあり、前4世紀末のアレキサンドリアの建設により、この一帯が古代を代表する三大文化の坩堝であり、交流の中心であったことは疑えない。前3世紀半ば以後にはエジプト民衆文字による占星術的文書が登場しはじめ、紀元前後にはホロスコープに関するものも見受けられる。かくして、紀元後2世紀にはプトレマイオスによる『テトラビブロス』という占星術の主要著作が出現することになった。だが、その話題にはいるまえに、占星術の普及をたすけた当時の思想状況を考察しておこう。

(b) 占星術普及の思想的背景 占星術が広汎な信奉者をえた背景には、それを促す思想があった。古代の思想家たちは、当然、天体を含む自然界の人間への多様な影響を信じていた。降雨と農作物、日照と人間の健康との関係などは否定するのに困難な事象であるが、とくにアリストテレスはその関係を重視していた。しかし、これらの間の神秘的関係を説いたのはストア派、とくに、中期ストア派の思想家たちであった。

ストア派はキプロス出身のゼノンを始祖として前4世紀末アテナイに出現した。彼らは世界一靈魂としてのロゴスという能動的原理と一切の性質をもたない第一質料という消極的原理の二つの基本原理からあらゆる事象の説明を試みたが、「全宇宙は秩序づけられており、合理的な法則で支配されている」というのがその基本的な発想であった。そこで、ロゴスという世界一靈魂はあらゆる未来の現象を予知し、人間の未来も彼らのいう「運命」(heimarmenē)として規定されている。人間の靈魂はこの世界一靈魂にあずかり、その一部でもあって、その肉体に浸透している。宇宙は氣息(プニューマ)に満たされた一種の生体で理性や感情を備えている。その結果、すべての存在物の間には完全な「共感」(sympatheia)が存在し、人間は全体を映す小宇宙である。かくて、未来の予知は人間にとって可能であり、あらゆる形での占いを彼らは容認した。

それでも、前2世紀半ばのパナイティオスは占星術に懐疑的であったが、その弟子でキケロの師ポセイドーニオスはその地位を利用して占星術の普及につとめた。前1世紀後半の詩人 Manilius の占星術的教訓詩 *Astronomica* は2世

(4)

紀に編集され、さらに、J. F. Maternus も大部の著作 *Mathesis* を著わしている。ここでは、これらの資料のいくつかを G. Luck の *Arcana Mundi* から引用しよう¹⁾。まず、占星術をはじめ当時のローマ社会における占いの流行に批判的であった前1世紀前半のキケロの主張を考察する。彼の著書『占断論』(*De divinatione*) は占星術・占断術に対する批判の典型として名高い。

神的な予言のより奥深い学問のほかに技術的予言の相対的にやさしい学問がありうるだろうか？ 内臓や稲妻や星のうちに前兆をもつ出来事は長期の観察にもとづく学問によって [解釈され]、長い伝統はどの主題においても、蓄積された観察によって、信じられぬ量の知識をくわえる。この種の知識は神からのいかなる影響、いかなる刺激なしにも、可能である、なぜなら、頻繁な記録はなにがなにか別のことの結果としておこり、それがなにを意味するかを示しているからである (Cicero, *De divinatione* 1.109; 271).

ストア派の人々は、彼らがとくに熱心に彼らが [強調したいと思う] ときには、実際にこう論ずる：「もし神々が存在するならば、占断が存在する；神々は存在する；それゆえ、占断が存在する」。つぎのように言う方がはるかに道理にかなっていよう：「いかなる占断も存在しない；それゆえ、いかなる神々も存在しない」 (Cicero, *De divinatione* 2.41; 273).

占星術に関するもっとも古い直接的な言及は、セネカの父 (紀元前後) の著作『説得的話術』(*Suasoriae*) からの前1世紀の著名な修辞学教師 A. Fuscus の引用で、そこでは占星術者についてつぎのようにいわれている。

そのようにして彼らは未来について予言しているのでしょうか？ 多くの人々に彼らは長命を約束しながらも、あの [死の] 当日はなんの警告もなしに突然彼らをおそったのです；他の人々には彼らは早死を予言しましたが、それでも、その人々は故ない恐怖に苛まれながらも生きながらえたのでした

[原文不明確]. ある人々には彼らは幸福な人生を約束しましたが、運命は時をおかずにあらゆる災害をこの人々にもたらしました。

おわかりでしょう、わたしたちは不確かな運命をわけもっていて、これらのことはそのうちになんの真理ももちあわせずに小賢しい占星術者によって捏造されたものなのです。 . . . (Fuscus, *Suasoriae* 3.7.4; 324)

つぎに、Manilius の *Astronomica* からの引用を二つあげる。最初は占星術者について、つぎはストア主義者としての彼の「宇宙的共感」の主張である。

これらの人々 [神官たち] がわれわれの高貴な学問を確立した人たちである。彼らが、はじめて、運命がいかにして惑星に依存しているかを彼らの技術によって理解したのである (Manilius, *Astronomica*; 325).

その個々の部分が異なる元素——空気、火、土および平らな海——から成る巨大な宇宙のこの有機的な構造は精神の神的な力に規定されている。神は全体を通して神秘的な仕方で息をし、それを不思議な手段によって決定している。その一部が他の部分にその力を伝え他の力を受けとっているすべての部分の間の相互関係を、神は制御している。結果として、宇宙的共感が多様な現象の間で永遠に支配していることになる (ibidem; 329).

(c) プトレマイオスの『テトラビブロス』 紀元前1世紀から紀元後1世紀ごろまでの占星術に関する賛否の議論は当時の思想状況を映しているが、この状況に決定的な影響を与えたのは、プトレマイオスの著書 *Tetrabiblos* であった。とくに、その序論部分は本論文の趣旨からしてもきわめて興味ふかい。

おお、シュロス！天文学による予知の目的 (*prognōstikon telos*) を適えるもののうちで二つが最良でもっとも権威あるものであるが、その一つは、順位においても能力においても最高の位置を占め、われわれが太陽や月や星々の

(6)

運動の、相互のまた地球に対する、その時々配置をそれにしたがって理解するものである；第二のものは、それらがとりまいてるものにそれらの配置の固有の本性によってもたらされる変化をそれにしたがってわれわれが考察するものである；第一のものは、それ固有のそれ自体からして望ましい理論を有していて、たとえ第二のものとの結びつきという目的が達成されずとも、可能なかぎり論証的に (*hōs malista enēn apodeiktikōs*), それ独自の論文形式にしたがって君に論述された；第二のものについても、現状ではわれわれにとって同じように自己完結的とはいえないまでも、哲学に適うようにわれわれは説明しよう、そして、多くの事物における物質的性質の薄弱さと比較不可能性に原因は帰せられるのであるから、とりわけ真理を求めることにいそしむ人が、その第二のものの把握を、第一のもののそしてつねに同様なままである不変なもののもつ確実さと比較したりすることのないように願う、また、きわめて多くの重要なものがそれらを取りまくものからの原因をかくも明らかに示している以上、その可能性に関する探究に躊躇することもないように願っている (*Tetrabiblos I.1 : 2*)²⁾。

つづいてプトレマイオスは、すべて到達困難なものは誹謗されやすいが、上述の最初のものへの非難は無理解なもの仕業であるが、第二のものへの誹謗には納得のゆく言い訳がある、なぜなら、いくつかの分かり難い点が全体を理解不可能と思わせたか、多くの既知の事柄を述べずにはすまされぬ困難のためその目的も無用なものとして軽蔑されたかのいずれかであるから、と弁護している。

この引用において注目すべき点を指摘しておこう。プトレマイオスは明らかに「天文学による予知」という表現を用い、それに関する知識については、「知識」、「学問」といった表現は用いずに、単に中性名詞 (*proton, deuteron*) を用いている。それが明瞭な意図によるものかどうかは分らないが、その第一は論証的に論述され、第二は自己完結性において劣る哲学的な仕方で説明されると主張されている。第一のものはその主著『アルマゲスト』のことであり、それは論証的な学問として正統的知識の位置を占めるものと意識されているが、

第二の占星術的知識はその条件を満たさないと述べられていて、その確実性の劣る理由として、地球上の世界を構成する4原質の変化による予知の不可能性があげられている。それゆえ、天体に関する天文学の確実性は天体を構成するアイテールの不変性に依存し、予知も確実性をもつが、地上の世界に関連する占星術的予言の不確実性は地球上の物質の可変性にもとづく。この点未来の予言を拒否したアリストテレスが天体についてのみ現象の恒常性を許容していた態度を忠実に継承していると言えるが、それはつぎの引用でも明らかである。

・・・アイテールの的で永続的な物質から発するある力が、地球周辺のすべてのもの、一般的に可変的なものに向って伝えられ浸透していること、月下の基本的原物質のうちで火や空気はアイテールから下降する運動によって囲まれ回転させられている一方で、その他のすべて、つまり、土、水、および、そのうちの植物や動物をとり囲み養っているということは、すべての人にきわめて明らかであり、多言を要さぬと思ってよかろう (Terabiblos I.2: 6)。

つづいてプトレマイオスは太陽の影響として季節の変化、動植物の発生・成長、その位置変化にともなう寒暖・乾湿など、また、月の与える影響として潮の満干やその満ち欠けにともなう動植物への効果などに言及しているが、その際、地上の生物・非生物と月との間の関係としてストア風の「共感する」(sympatheō) という語が用いられているのが注目される。さらに惑星の影響について述べたあとでプトレマイオスは月上の世界のみならず、月下の世界に対する天空の影響を考慮しなければならない占星術の可能性について、その正確さに一定の留保をつけながらも、可能性を容認している。その留保条件とは、

- 1 質料に関するすべての理論は推量可能にすぎず、確証不可能である
- 2 この理論は多くの類似せぬものから合成され、昔精密になされた予知を現在に適合させるには、昔の惑星配置と現在のそれが類似していなければならないが、その配置は長期間不変ではありえず、宇宙の事物の完全な再帰は不可能か、人間の感知しうる期間内では実現不可能である

ために、どんなに精細かつ合理的に探究しても事態の本性上誤りうるということである (Tetrabiblos I.2; 14, 16)。この点では月下の世界の未来事象の予知にまったく否定的であったアリストテレスに比して、彼は楽観的で、アイテールの浸透の程度に応じて予知の可能性を認めていたと思われるが、これはアレキサンドリアの知的環境と当時のストア的な思想状況によるものであろう。

彼はさらに I 章 3 節で予言の効用について述べ、占星術に長けたエジプト人の「占星術と医術の結合」に言及し、占星術を通して医療を行う技術に「イアトロ術」(iatromathematike) なる語を使用している。この点ヒポクラテス学派と相違し、後述するガレノスに似た思想傾向が見てとられる。彼はまた I 章 4 節以下で諸惑星や恒星の占星術的な力を、II 章でそれらにもとづく予言の問題について述べているが、われわれは、つぎに、5 世紀初頭までのキリスト教と占星術との関連について簡単に論ずることにしよう。

(d) 初期キリスト教と占星術　ローマ帝国の一隅に出現したキリスト教は、迫害に抗しながら 312 年の皇帝コンスタンティヌスの改宗を経て、ついに、380 年ローマ帝国国教の地位を獲得した。その布教過程で護教論形成の必要を感じた初期教父たちに思想的背景を提供したのはプロティノス (205-70) に始まる新プラトン主義哲学であるが、いま、彼らの護教論の内容に立ちいるのは控え、彼らの自然学に対する態度についてのみ一言しておきたい。

初期教父たちの最大の関心事は、キリスト教教義、とくに、人間の救済の問題にあったから、自然学研究が歓迎されるはずはなかった。それは Tertullianus (165-220) のつぎの言葉が端的に物語っている：キリスト・イエズスの後にはいかなる好奇心もわれわれは必要とせず、福音の後にはいかなる探究も必要ではない。このような無関心の結果、Lactantius は大地の球状性を否定し、その球状性は容認したアウグスティヌスも地球の逆の側に住む人間の存在を認めなかった。地球には住むに耐えぬ高温地帯が南北両半球を分けているから、南半球の住民は北半球の住民と異なり、人類はすべてアダムとイヴの子孫とする聖書の教えに反するというのがその理由であった (Dijksterhuis 90-3)。

占星術に対するキリスト教思想家の態度を考察するにはキリスト教的時間観

について考察しておく必要がある。この問題はキリスト教出現後の思想の基本的枠組みを規定するもっとも重大な要素を含むとわたしは考えるからである。古代オリエントの民族の多くは円環的時間観を有していた。古代エジプトでは時間は再帰する状態の継起とみなされ、過去と未来の区別をもたなかった(Whitrow 25)。はやくから天変占星術に関心をもっていた古代メソポタミアの諸民族は、その天体の地上への影響への信仰を考えると、歴史的進歩の思想をもっていたとは考えがたく、天体の運動に象徴される円環的な時間観を有していたと思われる(Whitrow 31)。前5世紀の古代ギリシアにおいては、その思想の〈過去回顧的〉性格からして、主要な哲学学派が未来を軽視して過去を重視する円環的な時間観を有していたことは驚くにあたらない(Whitrow 46)。

古代社会で例外的なのはペルシアのゾロアスター教である。前6世紀から前331年のバビロニア征服のころにかけてペルシアではゾロアスター教が最盛期を迎えた。その始祖ツァラツストラは北ペルシアの牧羊族の出で、多神教を排してマツダ神への信仰を説き、真理に組みするものは不朽の栄光を獲得し、虚偽に組みするものは「永年の暗闇」に罰せられると説いたが、この「最終の事態」の教義こそ、終末論の最初の体系的主張で、ユダヤ教とキリスト教に深刻な影響を与えた(Whitrow 33-4)。

その由来はともかく、キリスト教は救世主キリストの出現にはじまる世界の出来事の一回性と最後の審判におわる歴史的終末論を主張し、この直線的な時間観は古代世界を支配していた循環的で再現可能な時間観と基本的に対立していた。そして、それを明瞭に主張し、とくに、ギリシア人の時間観を弾劾したのは古代最大の護教家アウグスティヌスで、彼はその著書『神の国』13章でキリスト教教義を支える終末論的な直線的な時間観を明確に述べて、それに反するギリシア人を痛烈に非難している。この時間観にたてば、天体の再帰現象に基礎をおく占星術はその根拠を失うことになる。さらに、占星術はその決定論的な発想から未来を知る全知の神と人間の不完全な知識との関係をめぐる議論を提起し、占星術はいわば神の智慧を盗むことで、それは悪魔の助けを借りて可能になるという議論を生むことになったのである(Dijksterhuis 95)。

5 医術

前5世紀以降ギリシアにおいて従来医術の中心であった「神殿医術」に対してヒポクラテス学派が批判の眼を向け、医術の脱宗教化が顕著となったにもかかわらず、アスクレピオスの神殿を中心とする神殿医術はかえって隆盛に赴いた。この事実にも医術のもつ特異性がうかがえるが、ヘレニズム・ローマ時代においてもこの状況は変わらなかった。以下その経緯を見ることにするが、便宜上2世紀半ばのガレノスの前後にわけて論述を進めることにしたい。

A ガレノス前の医術

医術においても、自然学と同様、従来の裸眼による素朴な観察がより意図的で器具を媒介とした観察、わたしのいう〈有理的経験〉へと変化した。つまり、この時期には解剖学的所見が尊重され、生体をふくめて解剖がしきりに行われていた。ギリシア時代に解剖が尊重された明白な証拠はなく、人体解剖がはじめて行われたのは前3世紀のアレキサンドリアであるとされる。「紀元前3世紀のアレキサンドリアの状況は野心的な学者たちと当時そこに存在していた学問のパトロンたちとの特別な結びつきの点で例外的であった」(Lloyd 77)。なかでも、カルケドンのヘロピロスとケオスのエラシストラトスは著名で、前者は600体の解剖をとくに公開で行ない、後者は囚人の生体解剖をも行なったという。1世紀の著述家ケルススや1世紀末の教父テルトゥリアヌスさえ生体解剖に従事したといわれる。(Lindberg 120; Histoire 242; Lloyd 75-7)。

小アジアの出でアレキサンドリアに移住した前3世紀前半のヘロピロスの解剖学に基礎をおく生理学的考察は注目に値する。彼は生命現象を四つの基本的な力：肝臓と消化器官を座とする栄養力、心臓を座とする熱力、脳を座とする思考力、神経を座とする感覚力、にもとづけた。脈を用いて心臓の運動を研究して、その収縮と拡張およびその間隔を区別し、水時計による脈拍数の測定を診断に利用した。また、脳と神経組織を解剖学的に研究して脳の軟・硬膜を区別し、脳と神経および脊髄との結びつきを調べて感覚神経と運動神経の別を認識していた。さらに眼から脳への神経をたどり、それが微細な氣息（プニュー

マ) に満たされているため空虚だと論じた (Lindberg 120-1; Histoire 242-3; Lloyd 77-80).

彼よりすこし若いケオス島出のエラシストラトスは、アレキサンドリアに長期滞在した後アンティオキアの宮廷に仕えた。彼は実際的な診断家で、ギリシア風の瀉血その他の極端な浄化法を批判し、大胆な生理学的病理学的理論を提唱した。原子論の影響をうけて物質は微少な真空空間によって分離された微小粒子からなるという粒子論と氣息論によって生理的過程を説明しようとした。彼の理論で注目すべき点は有機体の活動を機械論的に説明する試みである。彼は人体組織は静脈、動脈および神経を含み、これらが多様な基本物質の運搬経路として身体各部を機能させると信じた。食物は胃において、熱的に処理されるのではなく食道の蠕動と胃の収縮によって運ばれ、胃の内部で咀嚼（粉碎）されて機械的に液状化され、胃壁と腸壁の微小孔を通して肝臓に運ばれ血液と化する。血液は静脈を通して身体各部に運ばれ、消化と成長の役割をはたす。これらの運搬作用は「真空嫌悪の原理」：ある物質が残した空虚な部分を残余の物質がうめる、によって機械論的に説明された。動物の死体解剖では動脈中に血液が観察されなかったため動脈は氣息のみを含むとされたが、動脈切断のときの出血は氣息の噴出後の隙間を付近の静脈中の血液が埋めるためとされた。氣息は呼吸中に大気から吸いこまれ、「静脈的動脈」（今日の肺静脈）を通して心臓の左側に、さらに動脈を通して身体各部に分配され、生命力を付与する。神経はもっとも繊細な氣息、心的氣息を含み、これは動脈中の氣息が脳において洗練されて生じ、感覚と運動の機能の達成に責任をもつ。これらの物質運動の説明にも、彼は自然の真空嫌悪にうったえて、機械論的に説明した。とくに、一方向に作動する心臓内の弁の発想は注目に値する (Lindberg 121-2 ; Lloyd 81-5)。また、金属容器に入れ食物を与えず数日放置した鳥などの排泄物ごとの目方は以前より減少している、という彼の実験が伝えられ、推理からのみ結論された物質の強い気化作用の存在を実験によって検証したとされるが、真実であれば、〈実験的検証〉の希な事例といえよう (Histoire 244)。

この両者は以後の医者たちに多くの影響を与えたが、とくに彼らの学派が形

成され学説上の権威として崇拜されることはなかった。一般的に、彼ら以後ローマ時代にはいるまで医学は衰退していったが、数世紀のうちには、両者の学説上の相違にもかかわらず、その伝統をひく人々の間で「合理主義者」あるいは「独断論者」とよばれる一派が形づくられたが、この派の間でも共通した意見が見られるよりは、病因に関する仮説の提出や生理学的研究の重視などの医術理論への思弁的な努力や自然哲学的傾向によって特徴づけられていた。一方、医学の思弁哲学的傾向に反対する人々は前3世紀後半のコスのピリノス以来「経験主義者」とよばれる一派を形成し、生理学的・解剖学的知識や病因の探索などは無用と考え、医者は可視的症状や原因にのみ眼をむけて過去の経験にもとづく治療に専念すべきだと主張した (Lindberg 122-4; Histoire 281)。

さらに、1世紀のローマには「方法主義者」とよばれる一派が出現して、他学派は医術をいたずらに複雑なものとしていると批判した。彼らの意見では、病いは身体組織を形成する微少分子が通過する小孔の収縮と弛緩によって生じ、前者は鬱血 (stagnosis), 後者は血液の異常流血 (rysis) をひきおこす。治療法もすべてこの前提からえられ、半年内に習得されると説かれた。この単純な主張はローマの貴族の間に普及して、ヘレニズム世界全般で支持された。理論的な医学のこの全般的な退廃と混乱のうちで注目されるのは紀元前後の A.C. Celsus である。彼自身は百科全書家で医者ではなく、8巻本【医事について】(De re medica) はギリシア語からの翻訳と思われるが、そこに見られる医学上の諸学説に関する広範な情報と精密で議論の余地のない経験にもとづく臨床的観察とは評価に値する。これら種々の主張の交錯する世界に古代最大の医者と称せられるガレノスが登場した (Lindberg 119-22; Histoire 282-3; Siraisi 3-4; Loeb xiii-xv)。

B ガレノス以後の医術

ガレノスは129年学芸の中心地の一つ小アジアのペルガモンに生まれ、哲学と数学を学んだ後スミルナで医術を学び、アレキサンドリアとペルガモンを経てローマに居を定め、富裕階級、とくにマルクス・アウレリウス以後数人の皇帝に医者として仕え、210年以降に没した。きわめて多作の彼の著作は哲学を

含む古代医学の集大成で、ヒポクラテスに並ぶ権威として多大の影響を与えた。

ガレノスはヒポクラテス学派の影響で、臨床的な観察、症例研究、診断と予後に対する関心を重視し、その4体液説を継承した。彼にとって病いとは体液間の平衡を欠くことであったから、体液に結びつく特定器官の決定とその性質が診断において重要視され、その診断法の新しさは病気を特定器官に局所化する点にあった。また、彼は解剖上の知識の重要性を説いたが、もはや人体の解剖は不可能だったので、墓の掘り返しなど偶然的な解剖的知識の集積を勧め、まだ直接に骸骨が吟味できるアレキサンドリアに行くことを推奨した。彼自身は主として動物の、とくにマカークというアフリカ産短尾猿の解剖から人体の知識をえていて、動物にのみ見られる特徴を人間にも帰せしめる誤りも犯した。その有名な例は「驚異の血管網」(rete mirabile)よばれる動脈組織で、有蹄類にのみ見られるのに彼は人間にも存在すると信じた。しかし、近世以前のヨーロッパに解剖学的知識を提供したのはガレノスなのであった。

ガレノスの生理学はプラトンの3靈魂説とエラシストラトスの生理学の影響をうけた。プラトンは人間靈魂を合理・感情・欲求靈魂の3部分にわけ、その働きは、それぞれ、脳、胸および腹部にやどるとしたが、ガレノスはこれにエラシストラトス生理学の3機能を対応させ、生理学の3器官的枠組みを考案した。脳は神経の起点で、感覚・運動機能を説明する心的氣息を含む。感情の座である心臓は身体の全部分に生命力を与える動脈血と生命的氣息を伝える動脈の起点で、欲求と欲望の座である肝臓は身体を静脈血で養う静脈の起点なのである。この理論によれば、摂取された食物は胃において機械的な作用だけでなく生命的熱によって chylos とよばれる液となり、これは胃と腸の壁を通して周囲の静脈にはいり、静脈によって肝臓に送られる。ここで、chylos は静脈血を産みだす。これが身体の養分で、静脈を通して諸組織・諸器官に運ばれ消費される。それゆえ、静脈システムは肝臓を起点とし栄養補給の責任を担う。

静脈血は大静脈 (vena cava) を通って心臓の右心房にはいり、三尖弁を経て右心室に達する。ガレノスはエラシストラトスに反して動脈が血液を含むことを認めたから、この血液がどうして動脈内にはいるかを説明する必要があった。

そこで、「動脈的静脈」、今日の肺動脈がこの静脈血を肺に運ぶが、血液を心臓に流入させる大静脈の流入口の口径が心臓からの流出口である動脈的静脈の口径より見かけ上大きく、その差は心臓が栄養分として消費する静脈血の量を考慮しても大きすぎるので、血液の一部は右心室から直接左心室に移ると彼は考え、この少量の血液は心室間の隔壁の厚い筋肉中の小孔を通して左心室に浸透し、肺から心臓へと氣息を導入する大動脈に左心房からはいると結論した。

血液のごくわずかな部分は、心室間の隔壁中の穿孔 (trema) のおかげで、右心室から左心室へと吸いこまれる：これら [穿孔] の [長さの] 大半は見えてとれる；それらは大きな口の立坑 (bothynos) に似ていて、しだいに細くなっている；だが、現実には、それらの最後の終点は見ることができない、それらが小さいのと、動物が死んでしまうと冷えて縮んでしまうからである。しかし、ここでも「自然は目的なしになにもなさぬ」という原理から出発するところのわれわれの論証は、心臓の心室間のこれらの血管の連絡網を発見する；なぜなら、このように狭い末端でおわる立坑の出現は場当たりでも偶然でもありえないだろうからである。

そして、第二に、心臓の右心室内に存在する二つの開口部のうちで一方は血液を流入させ、他方は流出させるが、流入口の方がはるかに大きいからである・・・ (Galen, Nat. Fac. III 15, 207-8 下線筆者)³⁾。

左心室に浸透した静脈血は心臓で温められ、肺から心臓の拡張によって左心室に吸いこまれた空気と混じりあう。その結果、生命的氣息を担ったより精細・純粹で温かくなった血液が動脈を通して全身に伝えられる。他の器官と同様に心臓も動脈血の受取手で、この動脈血の一部は「驚異の血管網」にはいって冷やされる。この血管網を通過した動脈血は精製され、もっとも精細な心的氣息となり、神経経由で全身に送られ、感覚・運動機能の説明に用いられる。

ガレノスはエラシストラトスの機械論的生理学を説得的とは見なさず、全身中の液体の運動の説明にはポンプ運動や真空の恐怖だけでは不十分と考えた。

彼は心臓の搏動が拡張によって肺から空気を吸いこみ動脈血を収縮によって動脈に送りこむとともに、動脈自体血液を運ぶ機能をはたすが、全器官が必要に応じて液体を保持し、吸引し、押し出す機械的でない能力を有することを確信していた。それゆえ、身体の諸器官は、ポンプ作用によるのではなく、その栄養上の必要から血液を運搬するので、静脈血は全身中を運動するのである。ガレノスの著作はギリシアの病理学的・診療的理論の最良の部分を含み、人間の解剖学的説明やギリシアの生理学的思想の輝かしい集大成で、彼は健康、病氣、治療に関する医学的哲学を提示したので、その医学体系は近世初期まで医学思想・教育を支配したのであった (Lingberg 129-31)。

以上のガレノス医学全般の考察にくわえて本論文の論旨に重要な彼の学問観について述べることにしよう。彼の医学体系は当時の合理主義的医学と経験主義的医学の混淆と評されるが、彼の学問観もその独創的な部分は否定できないにしても、一言にして言えば同じような折衷主義の産物と見なすことができる。とくに注目すべきは医学のような経験的症例にもとづかざるをえない学問領域においても彼は基本的に〈論証的体系〉としての医学に固執し、それを目標としていたという事実である。彼の著作から関連するいくつかの箇所をひこう。

……すぐさま治療法を詳述し、また治療法の発見につとめた多くの医者たちがなぜ失敗したのか、その理由を説明しよう (このことが真理へのより確かな確信にすくなからず貢献すると思われるからである)。そこで、まず、われわれは合理的方法と非合理的な経験の両方を同時に扱わないことをはっきりさせておこう：なぜなら、われわれの当面の仕事は治療のあらゆる種類ではなく、方法にしたがう治療法のみ発見だからである。……

したがって、なにかを方法的に発見しようとすることは偶然にあるいは成りゆきのままに発見することとまったく異なる。方法は順序立ててある道筋にしたがってゆき、その結果、最初に目がけていたことに探究者が到達するまで全段階を通して順序よく進む探究における第1段階、第2段階、第3段階、第4段階、等々、が存在することになる。

しかし、経験主義者たちが彼らにとって発見の、また教育のいかなる必然的な順序など存在しないと主張するとき、彼らは正しい：経験は体系的でなく不合理で、求めるものの発見に到達するのには幸運が要求される。・・・

三角形に関する論証におけるように・・・問題の事柄は二つの前提から証明された：その第1は5尺と12尺の2辺でかこまれている面積は60平方尺であることを述べている；そして、第2は三角形は与えられた面積の半分であることを述べ、かつ、示している。これらの各々はさらなる前提にもとづいて証明される必要があるが、それら自体は、それらの正当化が他の前提からも論証からも出てこないような基本的な前提にわれわれが到達するまでは、さらに他の前提にもとづいているのである。

わたしの意見では、医学で論証される事柄のすべてについても事情は同じある：それらの事柄のすべては自己を正当化するいくつかの基本的な論証不可能な命題に帰着されなければならない。もしだれでもこのようにして診断法について語ろうとつとめるならば、彼らは算数家、幾何学者や計算家のように互いに共通に一致していることであろう (Galen, T.M. 4. 1-6)。

この引用箇所は、ガレノスが経験主義者の経験尊重を評価しながらも、経験の偶然性に対して理論による確実性によって医学的知識を補強する必要を説き、経験主義と合理主義の折衷を主張していることを示している。しかも、理論の構成は数学のように確実な前提命題、公理から出発しなければならないことを説明している。そして、そこから展開される議論の過程、すなわち、〈定理の証明〉がどのように行われるべきか、についてつぎの箇所を引用しよう。

・・・では、われわれはどのようにしてこれ [定義] を正確に、また、方法的に見つけだすであろうか？「方法について」において特定した手段以外にどのようにしてであろうか？なによりもまず、共通の概念が承認されなければならない：それなしには問題の事柄の実質を発見することはできない。すべての人が承認しているある共通な概念をとりあげることが本質的で、さ

もなければ、出発点とよぶのは適切ではないとわれわれは言った。 . . .

. . .しかし、事柄の実際の実質の発見、探究と論証とは大衆の意見からひきだされるのではなく、その発見についてはあの著作【『論証について』】において詳細に述べられている学問的仮定からひきだされるのである。

(Galen, T.M. 14. 10-15. 6)

このように、ガレノスは診断法という実際的な分野においても感覚や知性に明瞭な出発点と定義とから議論を始め、さらにその議論の展開が「論証的に」行われることを要求していた。この点は『診断法について』の訳者 R.J. Hankinson の註に詳細に述べられている。「ガレノスの学問の固有の構造のモデルはアリストテレス的である：その理論的原型はアリストテレスの『分析論後書』で、有限個の定理が有限個の公理の集合から不可避の演繹的厳密さをもって生みだされるところの明らかに自己完結的な学問像がそれには含まれている」(Galen, T.M. 86).

さらに、ヘンキンソンは「. . .ガレノスはアリストテレス学派にせよ、ストア派にせよ、諸学派の通常の基礎的論理はすべての妥当な推論のモデルとなるには不適切で、さらに関係を扱うのには数学から借りてきた強力な方法で補われなければならないと考えていた」(Galen, T.M. 112) と述べ、アリストテレスが数学と異なり生物学的領域においては学問のもつべき演繹的厳密性と命題の普遍性の条件をゆるめて「多くの場合」における妥当性をふくむ推論を考究したのをうけて、ガレノスが医学を「推測術」(technē stochastikē) と性格づける可能性を探索していたことを指摘する。「ガレノスにとって推測術とは本質的にその定理が不正確さを許容するようなもの . . .であった。彼にとって、医学はその定理が偶然的なのではなくて、量的な概念の適用や予後という予測の難しさのゆえに偶然的で推測的なのであった。 . . .本来、医学は必然的真理からなる演繹的体系であるが、ある事柄がどれだけ特定の条件を要求するかについて個々人が正確に評価しようと試みるとときにはその体系に偶然性はいりこむのである」(Galen, T.M. 120-1). ガレノス自身その『自然的機能に

ついて」でつぎのように述べている。

われわれは通常つねに論証 (apodeixis) のみではなく、これにくわえて、明白な現象から力づくで納得を強いるような説得の手段 (pistis) を用いる・・・ (Galen, N.F. I - II ; 145-6)

この〈力づくの説得手段〉(pistis)には、人体という天体と異なる対象の偶然的な諸現象に直面する医者の一種の妥協的態度が見てとれるといえよう。

基本的には論証的ではあるが、なおそれを推測的方法で補強したいと考えていたガレノスの学問観と医学の特殊性に関する彼の意見をふまえたうえで、心臓内の眼に見えない「立坑のような穿孔」の存在というガレノス理論における悪名高い誤りについて検討しよう。この議論のうちにわたしは古代の説明論的知識論の構造的欠陥が露呈されていると思うからである。まず、ガレノスは動脈中には重く濃い静脈血と異なる軽く薄い動脈血が存在することを認めたから、この血液がどこでつくられて動脈中にはいるかが重大問題であった。血液の製造は肝臓の仕事で、その結果は静脈血である以上それは肝臓以外のどこかでつくられねばならず、動脈の起点である心臓が第一の候補として考えられたことは不思議ではない。そして、心臓に流入した血液が肺臓から心臓に環流するという循環論的発想をとらないかぎり、肺臓において静脈血がその栄養分として消費されてしまう以上左心室が動脈血の発生部署として考えられたのも無理ではない。ともかく、ガレノスは軽く純粋な生命的氣息を多く含む動脈血の生成と動脈への流入とを説明すべき経験的事実ととらえ、この事実を結論できる演繹上の前提として彼は右心室から左心室に血液を導く隔壁中の穿孔の存在という仮定を措定する。さらにそれを正当化する前提として自然は無目的になにも行なわないという原理をもちだす。この前提のいずれも当面の結論に対するアド・ホックな仮定である。穿孔の存在は、彼自身認めているように、観察上の根拠をもたぬ想像の産物であり、自然の原理はこの問題に対して無関係な一般的・抽象的な仮定である。かくして、この推論全体はその目標とする結論が動

かされないかぎりその妥当性を空虚に主張することはできる。アリストテレスが認め、またガレノスも認めていたように、正しい結論は誤った前提から妥当な推論によってえられるからである。もしもガレノスが左心室における動脈血の存在の方を前提として措定し、アリストテレス流の「事実からの推論」によって左心室への流入口をもとめたのであれば、おそらく観察不能な穿孔の存在よりは、観察されている静脈的動脈（肺静脈）の存在から、肺臓における血液の浄化と浄化された血液の肺臓からの流入⁴⁾を自然な結論として認めたであろう。この結論と穿孔の存在という競合する2命題を比べたとき、後者をその観察不可能性から否定することは困難ではないはずである。そのとき、彼は16世紀の血液循環論の先駆者たりえたであろう。ガレノスの理論は推論的に検証される構造をもたない説明的論証構造への固執が支えた空中楼阁として、13世紀間にわたって信じられることになったのである。

6 オカルト的知識

本論文の最後に「オカルト的知識」の表題のもとに錬金術、魔術、占断術を一括し、それらを個々の項目で論ずる。オカルト的知識とは元来「隠れた」、
「秘儀的な」知識の意味であり、「説明による理由の解明」を意図する正統的知識たることをみずから拒否する知識形態である。それらの知識のなかで後の科学の発展と密接な関係を有した錬金術から考察をはじめることになろう。

A 錬金術

錬金術と訳される英語 *alchemy* の語頭の *al* はアラビア語の定冠詞に発するが、つづく *chemy* の部分は、一説ではギリシア語の *chymos*、さらに動詞の *cheō* に由来し、「液体」、「液状化する」という意味をもつ（木村一相良、新訂独和辞典294）。また、一説では、エジプト語の *kamt*, *quemt* または *chemi* に由来し、これらはすべて「黒い」または「黒い物質」の意味で、ナイルの泥、もしくは鍛冶屋の金属加工の際に生ずる「黒い粉」から発したともいわれる（Luck 361）。したがって、この種の知識が多少体系化して名称を獲得したのは、エジプトもしくはギリシアであろう。

物質変化に関する知識は、陶器やガラス器具制作の窯業、金、銀、銅、青銅、鉄の製造などの冶金、さらに、染色、食料や酒の発酵・醸造などの経験から人類が習得し蓄積し、口伝にはじまり、文字の出現によって文書による記録へと形を変えながら後世に伝えられたものであろう。また、それらの製作品が技術的・芸術的には高度の水準に達していても、その物質的変化の過程をうらづける機構の解明はなされず、知識は理論を欠いた技術的処方水準に長らく止まっていた。理論的知識の形成は困難で長く模索の段階にあったことは無理からぬが、それはまた、各種の金属やガラスのもつ工芸的価値や武器の製造にからむ社会的・経済的価値とあいまって、人間の秘儀的関心をそそったためであった。古代フェニキアの海港ティルスの名を冠した Tyrian purple は色落ちしない鮮やかな染料として珍重され、ティルスの人々に多くの利益をもたらしたために、その製法は彼らの秘密とされ、いまだに明らかでないという事実はその一例である。また、この種の技術は器具の発明を要求したが、alembic という蒸留器具、フランス語でbain-marie という湯煎器具などが名高い (Luck 364)。

ところで、1875年に発表された紀元前16世紀の Ebers パピルスには孔雀石、赤鉄鉱、褐鉄鉱、方鉛鉱、錫石、銀、硫黄、海塩などの記載とこれらの医療への使用が見られる (Histoire 1059)。エジプトでは伝統的にこれら技術の処方と用法は秘密にされ、閉鎖的な団体に委ねられ伝承された。おそらくこの習慣は製作品のもたらす大きな利得を保持するため、製作法の伝授は秘儀的な色彩を強くもつこととなった。ヨーロッパで保管中のパピルスはエジプトの化学的知識の水準を示しているが、ライデンのパピルスには多くの魔術的な処方や媚薬の類いが記述されている (Histoire 298)。このように化学的知識は本来の実験技術的な物質変化の知識とは異種の欲求と結びつき、人間の延命などより神秘的な「偉大な業」の実現へと向い、伝説的な神話やヘルメス・トリスメギストスの名と結びついて、秘儀的な傾向をますます強めることになった。

この種の文献のいくつかは1世紀のもので、前250年ごろメンデスのボロスなる人物が魔術的・占星術的な思索をデモクリトスの名のもとに述べたうえに技術的な記述を加えたものが、後に『染色法4巻本』に発展して以後錬金術的

文献の出発点となった。錬金術のその後の発展に大きな影響を与えたのは Panapolis の Zosimos という 3 世紀末の錬金術者による 28 巻の著作で、そこには〈偉大な業〉、すなわち、卑金属の金銀への変換の基本的な着想が述べられている。この問題は「4 物体」(tetrasōma) とよばれる始原金属、銅、鉛、錫および鉄から出発する金属の〈生成〉と結びつき、後に「原理」の位置に高められる水銀と硫黄がすでに重要な役割を演じている。4 世紀の錬金術師のなかで注目に値するのは Synesius で、キリスト教に改宗して司教となったが、彼の書簡のうちには地下水探索法の最初の記述が見られる (Histoire 298-9)。

以下、錬金術の文献の内容とスタイルとを垣間見るためにヘルメス・トリスメギストスの教則の部分と Zosimos の著作の一部および「コマリウスの書」の題名をもつ作品の一部とを Arcana Mundi から訳出しておくことにしよう。

A 1 ヘルメス・トリスメギストスの教則

- I. 余の説くところは絵空事にあらず、信頼可能にして真実の事なり。
- II. 下界の事は上界の事のごとく、上界の事は下界の事に似たり。それらは一者の不思議な事々を成就すべく働く。
- III. 万物が唯一存在者の唯一の言葉より創造されしごとく、万物は一者よりその適応によって創造されたり。
- IV. その父は太陽にして、その母は月なり。風はそれらを腹中に運び入れ、その乳母は大地なり。
- V. それは全世界における完全の父なり。
- VI. 力は、それが大地に変ずるとき、強し。
- VII. 大地を火より、精を疎より分離せよ、しかし、それをなすに慎重かつ周到であれ。
- VIII. 汝の精神を極限まで用いて、大地から天上まで上昇させ、しかるのち、再び大地に下降させ、上界と下界の諸力を結びつけよ。かくて、汝は全世界における栄光を勝ち得、闇はただちに汝を置き去らう。
- IX. これはあらゆる精細なる事物を支配し、あらゆる堅固なる事物に浸透

するがゆえに、能力それ自体に優る能力を有する。

X. これは万物創造の途なり。

XI. これはここに樹立 [達成] された不思議な事々の起源なり。

XII. 余は宇宙哲学の三部門を所有するがゆえに、これが余の「三重に偉大なヘルメス」と称される理由なり。

XIII. 余が太陽の営みについて告ぐべかりしことは完了せり。

この教則の内容は理解困難であるから、G. Luck による解釈の要点を紹介しておこう。Iは序言にすぎないが、IIは〈ouroboros〉、「自分の尾を噛んでいる円環状の蛇」の姿で表現されるミクロとマクロの世界の照応関係を告げる。われわれがある物質を完全に理解すれば、他の物質をも完全に理解することができ、それが一者の不思議である。IIIは「唯一の存在者」は最高の神であり、この神はその秘密を人類に直接にか、またはヘルメスといった媒介を通して啓示する。もっとも微細な物質の創造は神の啓示のおかげで宇宙の創造と原理上等しい。錬金術師の業は神の業と同じレベルにあり、物質の創造は無限のプロセスの始まりにすぎず、一者の適応によって他の物質が創造される。さらに、IVでは創造的過程における本質的な宇宙力である太陽、月、風と大地のうちで、太陽と月は金と銀およびそれらの錬金術的作用と占星術的影響を、大地は食料とともにそれに含まれる貴金属を、風は種子の散布者であるとともにギリシア語のプネウマと同様「精神」を表現している。Vにおける「一者」は世界におけるもっとも完全な者を示し、一者が完全につくられれば、全世界も完全な状態になることを告げている。VIの「力」とは錬金術師を通して働く心的な力で、「大地」は実際に使用されるすべての固体状物質を意味し、人類にとって完全に有用であるためには精神的力は物質に変えられなければならない。VIIでは、大地は疎な要素、火は精細な要素であるが、両者の変換可能性、とくに、疎なる物質から火を抽出することは錬金術の一つの目的であることが意味されている。VIIIでは、物質、装置、作用過程が正しくても十分ではなく、錬金術師はある種の精神的態度と神秘的体験を身につけて、惑星世界を通して

上下しなければなにも獲得できないといわれる。IXにおける「能力」はギリシア語の *aretè* の訳で、有効性あるいは潜在力を意味する。錬金術師は「透視者」でなければならず、錬金術は新しい発見、新しい透視、新しい発明に依存し、これらは神から鼓吹されると考えられている。Xでは錬金術の物質創造はデミウルゴスによる世界創造になぞらえられ、錬金術師は自分を神的な存在と考えている。XIの「不思議」とは標準的なテキストに述べられている錬金術的手法に言及していると思われる。最後に、XIIにおいてヘルメス・トリスメギストスは読者に彼の教則が神の啓示にもとづくことを思い起こさせているが、「宇宙哲学の三部門」とは魔術、占星術および錬金術を意味する。かくして、XIIIの結びの言葉でこの教則はおわる。

A 2 Zosimos 「完成の業について」 抜萃 (2.231-37 Berthelot)

マダム、エジプト全王国はつぎの二つの技術に依存しております：事物を占有する技術と鉱物の技術であります。・・・それらの創造的な応用は王たちのものであります。・・・だが、これらの事の完全な知識をもつものもまた、それらを実践することはなかったのです、なぜなら、彼は罰せられたでしょうから。同様に、王国の銅貨鑄造法の知識を有していた職工たちも彼ら自身のために鑄造することは許されませんでした；彼らは罰せられたことでしょう。同じく、エジプト王たちのもとで「調理法」の技術と「手順」の秘密を知っていた人々は彼ら自身のためにそれを実行することはなく、エジプト王たちの財宝庫を満たすために働いて、彼らに仕えていたのでした。・・・

この「調理法」とは錬金術的処理法を意味するが、この文書からは当時の錬金術師とその周辺作業者の秘密保持の様が明らかである。

A 3 「哲学者の石」の神よりの聖なる技術をクレオパトラに教示していた哲学者にして高位の聖職者たるコマリウスの書

・・・かくして [哲学者たちは言う] われわれは美しい哲学を求めつつそれが四部にわかれることを発見し、それゆえ、それらの各々の本性の一般的観念、第一は黒を、第二は白を、第三は黄を、第四は紫または精製を有するということを見出した。他方、これらの各々はそれ自身の一般的本性 [?] から存在するのではなく、一般的に諸要素に依存し [?], [そしてそれゆえ?] われわれはそれからわれわれが体系的に進行することのできる核を有している。そこで、黒と白、黄と紫 [?] もしくは精製の間にはそれらの物質の浸軟と洗滌 [・濯ぎ?] が存在する。白と黄の間には金を鑄造する技術が存在し、黄と白の間には合成の二重性が存在する。

その作業は胸部形装置の応用によって完了するが、第一の実験は液体を酸素 [?] から分離することであり、これには長時間を要する。

つぎに来るのは浸軟で、これは水と湿った酸素 [?] の混合から成る [?].

第三は、その物質の分解で、その物質はAskelon 容器内で七回燃やされる。これが火の作用によって物質を白くしまた黒くする過程の操作法である。

第四は、それによって [物質を?] 他の黄色の液体と混合し所期の目的を達成するために黄化のためのワックス [?] を製造する黄化の過程である。

第五は融合で、これは黄化から金色化に導く。

この文書は技法的な処方に近いが、これによってなんらかの処置を実際に行うのは不可能であろう。それには口伝その他の手段による付加的な情報が必要とされるにちがいない。この点にも錬金術的知識の秘儀的性格が現われている。

B 魔術・悪魔学

一般に宗教と魔術の間に明確な境界線を引くのは困難である。この問題には立ち入らずに、つぎの点を指標として議論を進めることにする。宗教は超越的な神に敬虔で服従的な態度で祈り帰依するが、魔術は神が付与すると称する特殊な知識を用いて世界を変革しようとし、時により神を脅かす。この世界への〈働きかけ〉の意図に魔術の特徴を見ることによって、ルネッサンスにおける

近代科学成立への重要な契機を理解できるとわたしは考えている。

魔術 magic なる語はギリシア語の magos を語源とし、古代イラクの一部族の名称で、ペルシアにおける賢者あるいは未来の透視者や夢の解説者、また、ゾロアスター教の神官を意味したという。古代ギリシアの著名な magoi にはオルポイス、ピュタゴラス、エンペドクレスの名があげられ、古代において魔術と学問的知識とは明確に区別されてはいなかった。また、他のオカルト的知識と同じく古代三大文化の混淆から醸成されたことは、まず疑えない。

魔術の基本的原理には宇宙諸部分の相互的影響、いわゆる「照応関係」、もしくは、「共感」(sympatheia) があげられる。人間は、この関係を通して、宇宙の一部を変化させることで宇宙全体を変化させることができ、この方法の体得者がマゴスであり、彼は世界を変革し、未来を透視できるとされる。魔術は通常超能力秘術 (theurgy) と妖術 (goetic) に大別される。前者は思想的背景をもち、多くの哲学者もそれを行使する超能力秘術者と見なされ、後者は階級的にも下層と扱われる怪しげな魔法使いとされ、magos はしだいにこの妖術者の呼称として用いられるようになった。そこで、思想家のうちにも妖術者の嫌疑を受けて裁判にかけられ、身の潔白を証さなければならぬものも出現した。これは後世の魔女裁判の先駆といえよう。その一例が2世紀のプラトニスト Apuleius で、彼はその著書において、よしんば彼がマゴスの嫌疑をかけられても、マゴスは王家の子女の教育にも用いられた由緒正しい知識の所有者であり、その知識は宗教あるいは哲学であるとし、プラトンの『アルキピアデス』などを引用している (Luck 109-10)。彼の事例は当時でも「魔女裁判」が好感をもたれない人物を葬る手段として用いられたことを物語っている。以下魔術の理論的根拠を提供したといわれる思想の一例としてプロティノスの『エネアデス』の一節をあげておこう。彼自身は魔術の存在を信じていたが、その作用方法については確信をもたなかった。

プロティノス 『エネアデス』 4.4.40 (Luck 118)

魔術的作用をどのように説明すべきであろうか？ 共感によってか、それ

とも、類似のものの中には自然な調和があり、似ていないものの中には不調和があるという事実によってか、あるいは、単一の生命ある被造物に共同して影響する [あるいは生ける存在物の一致に向けて協力する] 多くの異なる大きな力が存在しているという事実のいずれかによってか? なぜなら、だれかがそれらを運動させたわけでもないのに、多くの引力と魔術的作用が存在するからである。真の魔術とは宇宙における「愛とその対立者、憎しみ」なのである [エンベドクレス]。最初の妖術家、最初の魔術医は人々周知の人物であり、その服薬と呪文とは人々のたがいに用いているものなのである。

さらに、同書のつづきの部分 [4.4.43] で、プロティノスは魔術的作用の存在は肯定しているが、その作用対象は人間靈魂の非合理的部分であって、合理的部分はそれを無効にすると主張する：賢人はそれらの外力を反呪文によって無効にしてしまう。実際、オリンピウスという敵対者が彼を魔術によって傷つけようすると、彼は「賢者」としての精神力によって押し返し、その魔力は敵対者自身に戻ってきたという話をポルフィリウスが伝えている (Luck 121)。

つぎに現在に伝えられているパピルスと碑銘板から実際に用いられていた魔術の手法について3例ほど引くが、2例目は求愛魔術である。

ライデン所蔵の魔術パピルス (PGM2:98)

もしだれかが悪魔にとりつかれたならば、その名を呼び、硫黄と瀝青を鼻の下にあてがえ。彼はただちに喋り、悪魔は退散するだろう (Luck 98)。

パリ所蔵の魔術大パピルス (PGM 1:121)

ある人を煙りをたてる没薬ミルラのうえで言わせるように仕向ける魔術ミルラを石炭のうえで燻し、呪いを唱えさせる。

呪文：「おまえはミルラ、苦く効果のあるもの、たがいに闘う人々を和解させるもの、愛の力を認めぬものたちを焼き、彼らを愛に強いるもの。だれもおまえをミルラと呼ぶが、わたしはおまえを心臓を食するもの、

心臓を焼くものと呼ぶ。わたしはおまえを遠くアラビアまで送ることはしない；わたしはおまえをYの娘，Xのところに，わたしが彼女に逆らって仕え彼女をわたしのもとにつれてくるために，送る (Luck 96-7).

さらに，ローマ時代にアフリカで実際に用いられた「呪文板」には当時ローマ帝国内で盛んだった繫駕競技で，赤，青，白，緑の4チームのうち青，赤2チームのファンが相手の白，緑2チームの敗北のためそれらを悪魔に引きわたそうとする呪文が記されている (Luck 91).

これらの例からも明らかなように魔術が悪魔の存在と密接に結びついていることは疑えない。悪魔信仰はメソポタミアに発するといわれ，バビロニアの悪魔学は比較的よく知られているが，それによれば悪魔は軍隊に似た階級制度に組織され，病気は悪魔のとりつきから生じ，悪魔払いによって治癒されると信じられていた (Luck 165)。しかし，demon という語の直接の語源であるギリシア語の daimon には「神」の意味はあるが，「悪しき神」，あるいは「悪霊」といった意味はない。Theos が「神」，daimon が「悪霊」を意味するようになったのはヘレニズム時代のことで，そのもっともはっきりした例は新約聖書のマタイ伝8章31節である。学問的な悪魔論はプラトン・アリストテレスの系統を引き，とくに，アカデメイア学頭クセノクラテスの影響を受けたプリュタルコスPlutarchusの悪魔論はプラトン学派の共通意見とされる内容をもつ。それによれば，悪魔は高度の集中力をもって思考する精神的存在で，感受性のきわめて高い人間をはじめとする精神的存在に自分の思考を受容させる大気の振動をひきおこすとされ，この能力によって，透視，予言その他が説明されるのである。また，伝統的に神に帰せられていた能力のいくつかは悪魔にわりあてられているが，神と異なり，悪魔は年をとり，幾世紀かの後には死ぬとされ，この悪魔の老化と死亡が古代世界の衰退の説明に用いられている (Luck 171-2)。

C 占断術

「占断術」の語はラテン語の *divinatio* の訳で，「占い」の方法を一般的に意味するが，すでに論じた占星術，魔術以外の多様な占いの手段のうちでも古代

において広汎に用いられたものについて簡単に考察する。占断術は、魔術が世界を変革しようとする人間の能動性を特徴とするのに対して、偶然的に生起する現象を通して未来を推し量るという点で受動的性格を有するといつてよい。

神託 古代、とくにギリシアにおいて有名なのはデルポイの神託で、ソクラテスの名とともに世に喧伝された。デルポイの重要性は、多分に非理性的で計画性を欠くギリシア人の心性に依拠しているといわれ、その神託は一貫性を欠いていたが、ギリシア人はそれに対する信頼を放棄しなかった。そして、デルポイの繁栄は、宗教のみならず政治、経済においても顕著で、それは各地からの巡礼のもたらす多量の情報によるところが大きく、銀行制度も機能していたという。だが、この繁栄もギリシア政治、経済の衰退とキリスト教の発展とともにしだいに衰微した。

この聖地で祭司職をつとめたプラトン主義者プリュタルコスによれば、神託的神霊の維持継続の責任を負っていたのは主神アポロンではなく、より低位の神々、神と人間の間の仲介者であり、人間にまさる精神の集中力をもつダイモーンたちであった。彼の理論では、オリュンポスの神々と異なり、ダイモーンは成長し、9720年後には死んでしまう。そこで、これらダイモーンたちの棲息地として、地球上には他の場所よりも宇宙力が集中する場所があるという信仰が生じ、そこが「聖地」となるという。それゆえ、聖地は下級神の支配する場所なのであった (Luck 204)。その有名な巫女 Pythia は流行の衣装をまとい、歌わず、香を焚かず、ただ月桂樹の葉と穀剥きの麦だけを焚いて神託を告げたという。また、セネカの甥 M.A. Lucanus はその叙事詩 Pharsalia で狂乱状態に陥る若い巫女の姿を克明に描写している。小さな震え声、逆立つ髪、いわば、アポロンに凌辱されたような「憑かれた状態」のうちで彼女は「ポンペイ戦役へのローマの不参戦」を告げ、疲労困憊して地上に倒れる (Luck 281)。

鳥トその他 小アジアからギリシア、ローマにかけて盛んに用いられたのは鳥ト (augurium)、すなわち、鳥の飛び方、鳴き声、餌の取り方などによって運勢を占う方法であった。この鳥ト師 (augur) たちは占い師ではなく、観察されたある前兆から神々がある行為や計画を承認しているかどうかを知るのがそ

の任務で、ローマ時代選挙や地方長官の就任といった重要な公共行事の前にはかならず行われたので、彼らは大きな力を持ち、ローマには彼らの組織があり、政治的に悪用されることもあった。また、これに似た *alectriomancy* (鶏ト) は戦いの前に同伴した神聖な鶏の餌の取り方を観察するもので、嘴から落すほど貪り食えば吉兆とされた (Luck 250-1)。

このほかにも時代と地方によって各種のト占法が存在した。ギリシア自然哲学の基本物質土・空気・水・火を用いる土占い、空気占い、水占い、火占いは、それぞれ、平面や空中に投げた土砂や埃の描く形、水または透明な物質表面上の幻覚的な像、火から見てとられる徴候などを手がかりとして予言を試みる手法で、特別の器具も技術も必要としなかったので広く行われた。この他にもエトルスク起源とされる動物臓器や稲妻を手がかりとするものなど枚挙不可能なほど多様なト占術が存在したが、これらはいずれも宇宙は靈的存在者に満たされその間には相互作用があるというストア思想の裏づけをのぞけばなんの理論的根拠ももたなかった。人々はまったく偶然的な薄弱な根拠にもとづいて未来を予見せざるをえなかったのである。この点について、キケロは「精々現象の繰り返し、頻度にもとづく推量にすぎない」という彼の主張を繰り返している (Luck 271-2)。

註

- 1) 以下 *Arcana Mundi* からの引用は著者名、書名、章、節の番号をあげ、さらに、セミコロンにつづいて本書自体のページ数をあげる。なお、[] 内は著者 Luck による補足である。
- 2) テトラピプロスからの引用は英・仏訳を参照にしたが、ローブ版ギリシア語原文からの翻訳である。引用箇所は同書の巻、節につづいて；の後にギリシア語原文の該当ページをあげてあるが、対訳本であるのでこの数字はつねに偶数である。
- 3) この引用文の段落以降の後半部分はローブ版の A.J. Brock による英訳とおなじギリシア語原文からの種山・内山両氏による日本語訳ではその趣旨において大きく異なる。英訳では心臓への流入口と流出口の口径の差が右心室に血液が残留する理由として訳されているが、ギリシア語原文を見るかぎり、逆に、血液が残留しているがゆえに流入口と流出口には口径の差があるという主張と理解され、邦訳の方が原文に忠実である。
- 4) ロイドは「彼 [ガレノス] は肺動脈が血液を右心室から肺臓へ流入させ、肺臓か

らの血液は肺静脈を通る左心室への帰路を見いだすことを正確に認識していた」と書いている (Lloyd 149) が、その典拠は明らかでない。もしこれが事実とすれば、ガレノスの穿孔の存在仮説はますます根拠薄弱といわざるをえない。

- 5) これはヘルメス文書中の Emerald Tablet と称される碑文の翻訳である。一般にヘルメス文書とよばれるものには多数のものがあり、その主なものには新井・柴田両氏による翻訳と注解があるので、詳細は同書を参照されたい。ここに訳出した碑文は簡潔に当時の錬金術思想の要点を物語るといえよう。伝統的にはヘルメス文書にはギリシア語原文からの Geber Ibn Hayyan によるアラビア語訳とそれからのラテン語訳が存在する。なお、ヘルメスはギリシア神話の神で、学芸・商業、さらには秘密取り引きなどの神であったが、のちにエジプトのトート神を意味した。トリスメギストスは「3倍偉大な」の意味である。

参考文献

- Barton, Tamsyn. *Ancient Astrology*. London: Routledge, 1994.
- Dijksterhuis, E. J. *The Mechanization of the World Picture: Pythagoras to Newton*. Translated by C. Dikshoorn. Princeton: Princeton UP, 1961.
- Galen. *On the Natural Faculties*. With the English Translation by Arthur John Brock. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1916. (Loeb Classical Library 71)
- *On the Therapeutic Method Books I and II*. Translated with an Introduction and Commentary by R. J. Hankinson. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- ガレノス 「自然の機能について」 種山恭子訳・内山勝利編 京都大学出版会 1998
(「西洋古典叢書」 I)
- 「ヘルメス文書」 荒井 献・芝田 有訳 朝日出版社 1980
- Histoire de la science*. Encyclopédie de la Pléiade. Librairie Gallimard, 1957.
- Lindberg, David C. *The Beginnings of Western Science: The European Scientific Tradition in Philosophical, Religious and Institutional Context, 600 B.C. to A.D. 1450*. Chicago: The University of Chicago Press, 1992.
- Lloyd, G. E. R. *Greek Science after Aristotle*. New York: W. W. Norton & Company, 1973.
- Luck, Georg. *Arcana Mundi: Magic and the Occult in the Greek and the Roman Worlds*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1985.
- Ptolémée. *Tétrabiblos dans la traduction de Nicole Bourdin de Villennes revue et présentée par André Barbault*. Vernal: Philip Lebaud, 1986.
- Ptolemy. *Tetrobiblos*. Edited and translated into English by F.B. Robbins. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1980. (Loeb Classical Library 435)
- Siraisi, Nancy G. *Medieval and Early Renaissance Medicine: An Introduction to Knowledge and Practice*. Chicago: The University of Chicago Press, 1990.

Whitrow, G.W. *Time in History: Views of Time from Prehistory to the Present Day*.
Oxford: Oxford UP, 1989.